

大阪商業大学学術情報リポジトリ

島唄継承における公民館講座の役割ならびに文化と経済の関係に関する一試論

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪商業大学アミューズメント産業研究所 公開日: 2015-09-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 豊山, 宗洋, TOYOYAMA, Munehiro メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/44

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



島唄継承における公民館講座の役割ならびに 文化と経済の関係に関する一試論

豊山宗洋

はじめに

1960～70年代に消滅の危機がいわれていた奄美島唄は現在継承者も生まれ、島内外の奄美関連のイベントでは欠かせない存在になっている。こうした継承はさまざまな主体がかかわり、さまざまな仕組みを構築してきたことで成果が生まれたのであり、豊山（2013）¹⁾は唄者（島唄の名人）と民謡大会（奄美民謡大賞、日本民謡協会民謡民舞奄美連合大会）の関係を分析し、それ以外の主体や仕組みについては今後の課題としていた。

本稿の目的は第1に、筆者のその後の研究も加味し、行政施策である公民館講座を中心に、自主的な取り組みとしての自主講座や地域島唄教室が島唄継承に果たした役割を、それらの相互関係を視野において明らかにすることである。奄美大島の島唄公民館講座は1970年代初めから始まったが、そこから、あるいはそこを通して唄者が育ってきているからである。ここで用語について述べておけば、本稿では自主講座という言葉、公民館講座として認定されていないが公民館という場所でおこなわれる講座という意味²⁾、地域島唄教室という言葉、公民館ではなく自宅等の異なる場所でおこなわれる教室という意味で用いる。それゆえ公民館講座や、自主講座は奄美のなかにあるということになるが、地域島唄教室は奄美のなかだけでなく外にも存在する。本稿は、関西の3つの地域島唄教室も分析の対象とする。

目的の第2は、唄者の生計のための生業（経済）と島唄継承（文化）の関係を明らかにすることである。奄美市笠利町^{さし}佐仁の唄者である前田和郎は、筆者のヒアリングにおいて、八月踊りの継続的な継承活動の前提として次のようにいていた。

なぜ佐仁は八月踊りがうまくいってるんですかという質問を受けたんですよ。そして僕は「継続的に活動することですよ」と答えた。継続的に活動するためにはと考えていくと、最終的には僕は経済力だと思う（前田和郎ヒアリング2011年2月18日）

奄美民謡には八月踊り歌と三味線歌（以下、島唄）があり³⁾、前者にかかわる上の前田の話は後者にも同様にあてはまる。それゆえ本稿が考察対象とする島唄においても、経済と文化の関係は重要な論点となる。

本稿の構成は以下である。1節では、島唄を習う生徒ならびに教える上級者・講師・唄者の動機を、先行調査ならびに筆者の現地調査にもとづいて明らかにする。

2節では、奄美大島の島唄公民館講座ならびに自主講座の状況を、開設時の状況も考慮に入れて紹介する。そこでは島唄継承に関して講座が果たしている機能、公民館講座と自主講座の関係が分析される。

3節では、奄美内の地域島唄教室に関して子ども地域島唄教室と奄美ちぢん（太鼓）・三味線製作所の島唄三味線教室を、奄美外の地域島唄教室に関して関西の島唄教室を考察する。ここでも島唄継承において教室が果たしている機能、教室と公民館講座の関係が分析される。さらに講師・唄者の生業と島唄との関係が事例的に示される。

4節では、3節までで示した議論のなかから、島唄の需要層、供給層の育成について公民館（講座）の果たした役割と、唄者の生業と島唄との関係に論点を絞って考察する。

1. 島唄の学習動機および指導動機

まず梁川英俊の調査を参考に、筆者のヒアリング調査等も加味しながら島唄公民館講座、自主講座、地域島唄教室に参加している生徒の学習動機を検討しよう。ただしここで注意を促しておきたいのは、これから示す学習動機は何も生徒だけでなく、公民館講座、自主講座、地域島唄教室の上級者、さらには講師や唄者にとっても当てはまるということである。というのも講師になっても、あるいは唄者として周囲から認められるようになって、彼らは学習しつづけるからである。

1) 生徒の学習動機

梁川は、生徒の学習動機という観点から2009年11月に奄美市笠利町の当時の公民館講座の1つである当原ミツヨ／秀毅夫妻の初級島唄講座、奄美市住用町の生元高男の島唄基礎講座を調査している⁴⁾。そこではいずれの講座も講師自作のテキストを用い、講師の唄・三味線に合わせて合唱する集団学習方式がとられ、生徒に島唄大会等のコンクール出場志向はほとんど見られなかったという。これは公民館講座が基本的に初心者を対象としているから、ある意味当然であるが、場所によっては初級と中級に分けて講座を実施しているところもある。実際、当原夫妻の担当しているもう1つの中級島唄公民館講座では、個人レッスンのもとと少なくない生徒がコンクールを目指していたという。

梁川の調査した当原夫妻の初級公民館講座の場合、生徒総数は37名、調査当日の参加者数は8名であり、年齢は50代2名、60代5名、70代1名と比較的高かった⁵⁾。生元公民館講座の場合は60代1名、70代6名、80代2名とさらに高齢であった。両講座の生徒は、受講以前は、ほとんどが島唄を歌えず、梁川はそこから「島では生活のなかに唄がある」という言葉が、必ずしも現実を反映してはいない」と推測している。この点については筆者も同様の意見をもつ⁶⁾。「島に住んでいる」「高齢である」というだけで島唄は歌えるようになるわけではない⁷⁾、耳にしていれば自然に覚えるというような簡単なものでもない。歌えるようになるにはそれなりの関心をもった学習 それを特段の努力と感ずるかどうかは別である が必要であり、そうした学習をしてこなかった層は島在住者・出身者にも数多くいる。そうであるからこそ1960～70年代に島唄の衰退が懸念されたのである。だが島に所縁のない人と比べると、島在住者・出身者は自らの成長や生活のなかで島唄に触れる機会は圧倒的に多く、その事実が、島唄に関心をもつ人や加齢とともに関心をもつようになる人を増やす理由ともなる⁸⁾。梁川は「受講生にとって島唄とは、長く島で生活してきて、退職や子供の自立などを機に自分の人生を振り返ったり、自らのアイデンティティを確認したりするときに初めてその存在に気づくという種類のものであるようだ」と述べている⁹⁾。これは「島人としてのアイデンティティの確認」が島唄の学習動機になっているということである。梁川の調査の枠組みでは、この動機は相対的に高い年齢層の島在住者にあてはまるが、それは後にみるように島出身の唄者や2世にもみられるものである。したがって本稿では島在住者だけでなく、島出身者、2世3世にも当てはまる動機だと捉えている。

梁川の調査で生徒のあげた、公民館講座を受講してよかったと思う他の理由として

「声を出して歌うのが楽しい」「ストレス解消」「友達ができた」という回答があり、そうした生徒にとっては「楽しみ・交流」が学習動機となっている。この動機は相対的に高い年齢層だけでなく、子どもたちにも当てはまる。実際、後にみる大笠利わらべ島唄クラブでは子どもたちは、友だちがいるからということで遊び感覚できている¹⁰⁾。この動機は島唄学習のきっかけとしては重要であるが、生徒にとって交流の場は必ずしも島唄教室である必要はないから、島唄を真剣に学習するようになる者、さらには講師や唄者にとっては必要ではあるだろうが、時間とともにウェイトが小さくなる動機だといえる。

梁川は、公民館講座以外に個人主宰の島唄教室も3ヵ所調査しているが、講座や教室への参加者は調査当日たまたま全員島出身者であった¹¹⁾。しかし調査教室の1つである坪山豊教室で「本土からの学校の先生たちが熱心で、ときに島人よりも熱心」という話を聞いており¹²⁾、同様のことは筆者のヒアリング調査で奄美市笠利町の前田和郎、宇検村の石原久子、瀬戸内町の永井しずのなどの公民館講座講師も指摘していた。2003年から2004年にかけて東京の奄美島唄教室を調査した末岡美穂子も、奄美出身者以外（大和人）では、奄美出身の歌手の歌を聞いて興味をもったり、発声の独自性に引かれていると報告している¹³⁾。この学習動機は「島唄の音楽的要素や歌詞、奄美文化全体への関心」ということができるだろう。こうした関心をもつ大和人が公民館講座や地域島唄教室でどのくらい学んでいるのかは後にみるが、裏声をはじめとした音楽的要素への関心は、筆者の調査でも、大和人の生徒のいる関西の武下和平島唄教室の武下かおり、上村島唄教室の望月孝雄が指摘していた¹⁴⁾。ただし発声の独自性に引かれるのは島出身者も同じであり、島在住の若手唄者の前山真吾は、唄者の唄を聞き「あの声は出せない。何とか出せるようになりたい」という理由で島唄を習いはじめている¹⁵⁾。

さらなる学習動機としては元ちとせが中野律紀にあこがれ、中孝介が元ちとせにあこがれたように、先輩など「先行者へのあこがれ」というものも重要である。筆者のヒアリングによれば、奄美市笠利町の森山ユリ子公民館講座（少年少女）は生徒が18名おり、小さい子どもら（最年少は3歳）は、第12回民謡民舞少年少女大会（小学4・5・6年の部）（2010年9月20日）で民謡日本一になった「莉子姉ちゃんのようにになりたい」ということで習いにきている¹⁶⁾。

2) 上級者・講師・唄者の学習および指導動機

上記の4つの学習動機のもとに島唄を学びはじめた者のなかには、より熱心に学ぶようになる者、講師・唄者のレベルに達する者もいれば、そうでない者、そればかりかやめていく者も数多くいる。熱心に学ぶようになった者については、堀田力の「音楽には単純で簡単に共鳴できるものから、本人の傾倒や努力を必要とするものがあり、難しければ難しいほどそれをきわめることでより大きな快感を得られ、それが自己実現につながる¹⁷⁾」という指摘は重要である。自己実現を「その人が本来潜在的にもっている可能性を現実のものとすることであり、その自己実現のかたちは個人で異なる」と捉えれば¹⁸⁾、「島人としてのアイデンティティの確認」「島唄の音楽的要素や歌詞、奄美文化全体への関心」「先行者へのあこがれ¹⁹⁾」といった動機のもとでより熱心に学ぶようになった者たちは、その動機の影響を受けながらも自らの潜在的な力の範囲内で多くの島唄を修得し、それぞれに自己実現をしていく²⁰⁾。島唄の講師や唄者のなかには、公民館講座や自主講座を数多く引き受けたり、イベントに積極的に参加したり、保育所や老人ホームの訪問といったボランティア活動に従事する人びとも少なくない。たとえば瀬戸内町島唄公民館講座の講師・永井しずの(2011年度)は郵便局で働きながら自主講座(瀬戸内町の言葉では自主グループ)も担当しており、公民館講座を含めて月に13コマも教えている。奄美市笠利町の公民館講座講師・森山ユリ子(2014年度)は笠利町で月4コマ教えているだけでなく、龍郷町でも1コマ教えており、2012年のヒアリングでも「生徒を年4回の大会に出場させるための個人指導も考えると、今年はフル回転している状態」とのことだった。

公民館講座の場合、講師は無償で教えているわけではなく、奄美市笠利町(2010年度)では1回3900円、大和村(2011年度)では1回5500円、宇検村(2011年度)では1回3000円(講師が村内居住の場合²¹⁾)の謝金が支払われており、それなりの経済的なインセンティブは与えられている²²⁾。しかし今述べたイベントへの積極的な参加、ボランティア活動、後述する大笠利わらべ島唄クラブの、公民館講座に指定されようといまいと30年以上続いている活動を想起するとき、堀田の「己れの存在の意義が、多くの人と同じ対象に共感するという事実によって、自ら確認できる²³⁾」という指摘は、彼らが活動に長期間取り組む理由をうまく説明している²⁴⁾。己れの存在意義は、具体的には賛同者や生徒が増加したり、彼らが自分と同じ考えをもったり行動したりすることで確認できる²⁵⁾。こうした非金銭的な報酬を得られることから、講師や唄者は島唄の継承

活動に長年かわり続けることができるのである。つまり島唄の講師や唄者は、経済的インセンティブもあるが、それだけではなく、あるいはそれ以上に自己実現の欲求を充足できるから島唄の継承活動にかかわるのである（この点は4節でもう一度触れる）。

2. 奄美大島の島唄公民館講座

1) 公民館講座の開設時期と現在

島唄公民館講座は、島唄の衰退といった状況に対応するために²⁶⁾開設された。瀬戸内町を中心に当時の公民館講座や地域島唄教室を調査した島添貴美子によれば、奄美大島各地で1971年に「名瀬市公民館の島唄学級（講師は福島幸義と吉永武英氏、のち武下和乎氏²⁷⁾」、「宇検村中央公民館シマウタ三味線教室（石原久子講師）」、1972年に「旧笠利町中央公民館の島ウタ教室（南政五郎講師）」「龍郷町公民館活動で三味線教室（山口よしやま義山講師）」、1975年に「瀬戸内町中央公民館の島唄・三味線教室（柳沢茂平講師）」²⁸⁾、1976年に「大和村公民館活動のシマウタ三味線教室（浜川昇、浜川信良講師）」が開設されている²⁹⁾。

直近で筆者の把握した奄美大島各地の島唄公民館講座を示せば、奄美市名瀬（2014年度）の島唄講座・佐藤隆幸^{りゅうこう}、三味線講座・久義一^{ひさしぎいち}、奄美市住用町（2014年度）の島唄講座・生元高男、奄美市笠利町（2014年度）の前田三味線と前田民謡の2講座・前田和郎、島唄（かさん節）講座・川畑美穂子／久保文雄、森山民謡（一般）と森山民謡（少年少女）の2講座・森山ユリ子／隈本範久／肥後芳郎、大笠利わらぶえ島唄講座・中村武廣³⁰⁾、宇検村（2011年度）の島唄講座・石原久子³¹⁾、龍郷町（2014年度）のマンデー三味線／島唄教室・内田和信、島唄教室（山ゆり会）・森山ユリ子／隈元範久³²⁾、瀬戸内町（2013年度）の島唄講座・永井しずの、大和村（2011年度）の三味線講座・宮田益^{ます}慶、島唄講座・浜川昇となっている。1970年代に開設されてから、そのすべてが存続しているとともに講座数も増加している。これは島唄や三味線学習への需要が増加していることを示唆している。

2) 島唄公民館講座の運営と自主講座

ここで島唄公民館講座の実際を筆者の現地調査をもとに確認しておこう。2011年8月

島唄継承における公民館講座の役割ならびに文化と経済の関係に関する一試論

11日の大和村公民館館長・大町博之からのヒアリングによれば2011年度の大和村公民館講座は、三味線講座³³⁾が宮田益慶によって中央公民館と今里小学校で月1回ずつ、島唄講座は初級講座と一般講座に分かれ、浜川昇によって中央公民館で第1、第3木曜日にそれぞれ開催されていた。三味線講座の申込者は20名(定員10名)と6名(定員10名)、島唄講座の申込者は11名(定員10名)と14名(定員10名)であり、開講4講座のうち3講座は定員を満たしていた。後者の島唄講座申込者の年齢と出身等をみれば、次のようであった。

表1 2011年度大和村島唄講座参加者

		参加者	年齢	出身等			参加者	年齢	出身等
一般	1	A	60歳代	Uターン	初級	1	O	40歳代	転勤組
	2	B	50歳代	地元		2	P	50歳代	転勤組
	3	C	60歳代	Iターン		3	Q	60歳代	Uターン
	4	D	70歳代	地元		4	R	50歳代	Uターン
	5	E	70歳代	地元		5	S	70歳代	地元
	6	F	50歳代	名瀬		6	T	60歳代	地元
	7	G	50歳代	名瀬		7	U	30歳代	Iターン
	8	H	50歳代	名瀬		8	V	50歳代	転勤組
	9	I	70歳代	地元		9	W	40歳代	地元
	10	J	50歳代	名瀬		10	X	不明	不明
	11	K	70歳代	地元		11	Y	不明	不明
	12	L	70歳代	地元					
	13	M	50歳代	地元					
	14	N	30歳代	地元					

注) 出身等の呼称は大町博之の使用した呼称に従っている。

一般講座と初級講座を比較すれば、前者では高い年齢層ならびに地元が多く、後者では転勤組、Uターン組が多かった。島唄講座は、初級であれ一般であれ生徒には地域イベントや大島地区の文化協会の会合等で発表するという学習インセンティブが与えられるが、一般講座であっても彼らのなかから奄美民謡大賞のようなコンクールに出場する者はいない³⁴⁾。それゆえ大和村公民館講座には島唄大会出場者(将来の唄者候補者)を直接的に育成する機能はない。

公民館講座は月に開催される回数が少ないため、島唄を修得するためには時間的に十分でなく、それを補うために自主講座が開催されている。自主講座の存在は、奄美市笠

利町の森山ユリ子教室、瀬戸内町の永井しずの教室でも確認でき、その形態は一樣ではない。大和村の場合は、生徒が別途費用を負担して講師の浜川に依頼しており、公民館の使用料は無料になっている。ここに行政施策としての公民館講座と、補習のための自発的取り組みとしての自主講座という島唄継承の1つの組み合わせの形態を見いだすことができる。

筆者は大和村で、公民館講座と同じ方式でおこなわれている一般教室の自主講座を見学した(2011年8月11日)。時期的にお盆前³⁵⁾であったため参加人数は少なく、年配者5名の参加であった。そこでは19曲所収の講師自作のテキストと「糸くり節」「諸鈍長浜」の歌詞の書いた冊子が使用されていた。講師の三味線・唄に合わせて全員が合唱し、節回しや音程の難しい箇所については反復練習する集団学習方式がとられていた。島唄のなかでも難しい唄は、裏声を含め音程の独特なかたちでの上げ下げがあり、当日の生徒たちは「諸鈍長浜」の「諸鈍長浜に打ちやげい引く波や 諸鈍乙女ぬ笑い歯ぐき(意味: 諸鈍長浜に寄せては返す白波の眺めは、あたかも諸鈍美人の乙女が笑ったときの歯並びのようで美しい)」という歌詞の「歯ぐき」の「きー」の音程が急に下がるところを歌うのに苦労していた³⁶⁾。それは繰り返し練習することでようやく修得できるものであり、それゆえ真剣に修得しようとする者にとっては補習機能をもつ自主講座が必要になる。

この場合の公民館講座・自主講座には島唄の需要層を形成するという重要な役割がある。島唄を初めて聞く人や初心者にとって「多くの唄が同じように聞こえる」というのは、島に所縁のない人だけでなく島在住者・出身者においてもよく耳にする話である。島唄を聞いてその良さや価値を評価できるためには、聞く人自身に享受能力が必要になる。公民館講座は、そうした享受能力を育成するという機能をもつのである。

つぎに奄美市各地の公民館の島唄・三味線講座をみてみよう。2008年度～10年度の期間で定員、受講者数の推移は次のようになっている。

島唄継承における公民館講座の役割ならびに文化と経済の関係に関する一試論

表2 奄美市各地の公民館島唄講座の定員・受講者数推移（2008年度～10年度）

	講座名	講師名	2008年度		2009年度		2010年度	
			定員	受講者数	定員	受講者数	定員	受講者数
名瀬	島唄	佐藤隆幸	60	64	60	60	60	49
	三味線（初級）	久 義一	40	41	40	29	40	27
	三味線（中級）	久 義一	40	28				
	初めての三味線	保坂英次	30	33	30	36	30	38
住用	島唄	生元高男	20	28	20	18	20	13
笠利	民謡（初級）	前田和郎	30	31	30	23		
	民謡（中級）	前田和郎	30	22	30	16		
	三味線	前田和郎					30	43
	民謡（一般）	前田和郎					30	36
	島唄（初級）	当原ミツヨら	30	31	30	35		
	島唄（中級）	当原ミツヨら	30	15	15	16		
	島唄（一般）	当原ミツヨら					30	38
	民謡（一般）	森山ユリ子ら	30	43	30	40	30	52
	民謡（少年少女）	森山ユリ子ら	30	25	30	19	30	23
	大笠利わらぶえ	山田逸郎					50	38
合 計			370	361	315	292	350	357

3年間で延べ31講座中17講座（54.8%）で定員を上回っている。

なお本稿では島唄・三味線と八月踊りの唄は区別し、前者だけを取り上げている。

出所）奄美市名瀬公民館ヒアリング時に入手した資料（2011年8月8日）

講座名を変更したり、統合したりという変化はあるが、2008年度は11講座中7講座、2009年度は10講座中5講座、2010年度も10講座中5講座で定員を上回っていた。定員合計と受講者数合計を比較すれば2008年度は370名定員に対し受講者数361名、2009年度は315名定員に対し受講者数292名、2009年度は350名定員に対し受講者数357名であった。参加者は年度当初から回数を重ねるにつれて減っていく傾向はあるにしても³⁷⁾、島唄・三味線講座に需要のあることは確認できる。

出身等に関するデータは入手できなかったが、島外からの転勤組も複数名おり、実際筆者が見学した2012年8月17日の奄美市名瀬の佐藤隆幸公民館講座でも転勤組が受講していた³⁸⁾。同講座は、当日生徒20名以上が参加しており、講師自作の12曲所収のテキストを使用し、講師の三味線・唄に合わせて全員が合唱、反復練習するという集団学習方式がとられていた。生徒のコンクール志向はここでもさほど強くないということであっ

た³⁹⁾。当日の講座で佐藤は、生徒全員がキーを下げ沈んだ感じで歌っていたことに対してもっとキーを上げて歌うように指示したり、「寝ぶらぬ(意味：眠れない)」という歌詞を「懐かしさ」がでるような節回し(曲げ)で歌う唄い方を指導したりしていた。「懐かしい」という評価は言葉で表現できない感激を体験したときの表現であり島唄にとって最高のほめ言葉であるが⁴⁰⁾、この場合はゆったりとした節回しに関連する手法のことである⁴¹⁾。

奄美市公民館の自主講座については名瀬公民館では存在を確認できなかったが、笠利町の森山ユリ子からは彼女のおこなっていた自主講座についてつぎのような話を聞くことができた。

子どもたちや大人たちが習いたいといったもんだから、自主で2年間くらい公民館行っって、行っったら公民館、そして教育委員会が取り上げてくれて講座にもっっていった(森山ユリ子ヒアリング2012年8月16日)

ここでは自主講座は、大和村における公民館講座の補習機能とは異なり、公民館講座に先立って住民の学習ニーズを試行的に受け入れる機能をもっていたことになる。

このような住民の自発的活動と行政施策としての公民館講座の組み合わせが成立したのは、社会教育施設としての公民館の性格に由来するが、それについては4節で論じることにはしたい。

3. 地域島唄教室

1) 奄美大島の地域島唄教室

i) 奄美各地での地域島唄教室の発足

公民館以外の場所でおこなわれる地域島唄教室のなかには、公民館講座とかかわりの強い教室もあれば、かかわりのない教室もあり、さらに教室は奄美のなかだけでなく外にも存在している。

唄者の主宰する奄美内の地域島唄教室は1968年に「喜界島の「安田民謡教室」(安田宝英講師)」、1971年に「旧名瀬市セントラル楽器の「島唄・三味線教室」(初代講師は

福島幸義氏、吉永武英氏)、1974年に「旧名瀬市の「武下流同好会」(武下和平講師)、1979年に「瀬戸内町古仁屋の「古仁屋朝花会」(中野豊成講師)、1983年に「旧笠利町大笠利の「大笠利わらべ島唄クラブ」(講師は對知広夫氏と大笠利三味線同好会)」が開設されている⁴²⁾。「大笠利わらべ島唄クラブ」は地区文化センターでおこなわれる分散講座であり、2014年度現在「大笠利わらべ島唄クラブ」という表記で公民館講座に指定されているが、分散講座としての性格上これまで指定・解除を繰り返してきたので本節で取り上げる。

ii) 子ども地域島唄教室

島唄を継承していくためには、子どもたちへの継承は重要な課題となる。学校における継承については須山聡の詳細な調査があるので⁴³⁾、ここでは奄美民謡大賞や民謡日本一を育てた2つの子ども地域島唄教室を取り上げよう。1つは、1990年に民謡日本一の中野律紀、1996年に奄美民謡大賞の元ちとせを輩出し、幼少期の里朋樹／ありす歩寿兄妹⁴⁴⁾を教えた古仁屋朝花会⁴⁵⁾、もう1つは、2005年民謡日本一の中村瑞希、2013年奄美民謡大賞の別府まりかを輩出した大笠利わらべ島唄クラブである。

古仁屋朝花会は中野豊成を中心に初期の瀬戸内町島唄公民館講座から派生的に生まれた。当時の公民館講座には初心者と上級者が混在しており、上級者であった中野のもとに講座で知り合った人びとが集まって発足したのである。その後少年部ができ、中野の自宅で、子どもたちの練習時間がおわると大人たちがやってくるかたちになった。前半の少年部では、会で作った歌詞集を使ってみんなでいっしょに一通り歌った後、1人ずつ歌いみんなが囃すという学習方式がとられていた。古仁屋朝花会が優秀な若い唄い手を育てることができたのは、集団学習のなかで才能のある子をいち早く見つけ、後半の大人の部になってもその子を残し徹底的に個人指導したからである⁴⁶⁾。それゆえ古仁屋朝花会は会として唄者の育成機能(供給機能)を担っていたことになる。このやり方は唄者の育成という点では効率的なやり方であり、そうした環境で育った中野律紀や元ちとせが奄美の人びとに与えた影響は非常に大きい⁴⁷⁾。

一方、大笠利わらべ島唄クラブは、才能のある子どもを、クラブとして特別指導するようなことはしない。表2で大笠利わらべ島唄クラブの講師名は山田逸郎となっており、彼は代表であるが自らは島唄も三味線もやらず、実際に指導を担うのは唄者の^{たいち}對知広夫、中村武廣、本田英雄、^{えいゆう}中村瑞希、別府まりかである。それゆえ山田はオーガナイ

ザーである。同クラブは1983年に学校の先生であった逸郎の父・望によって作られ、望の死後1988年に逸郎が引き継いだ。逸郎の行動の根底には「自分も島が好きだから、子どもたちも島を好きになってほしい」という、島人としての彼のアイデンティティにもとづいた考え方がある。したがって山田はクラブのなかで島唄のうまい下手で子どもたちに差をつけるようなことはしない。

うまくなって大会に出たい子は、個人的に指導を頼みに行く。私は、子どもたちにできるだけ島の思い出を作ってあげることが大事だと思っている。唄がうまい子を育てるのではなくて、島を好きな子に育ててほしい。もしクラブのなかでうまい子と下手な子に差をつけたら、下手な子には嫌な思いが残ることになる（山田逸郎ヒアリング2012年2月16日）

実際大笠利わらべ島唄クラブは島唄を学ぶだけでなく、遠足やバーベキュー、他地域の子もたちとの交流といったイベントも実施している⁴⁸⁾。子どもたちの親を巻き込み（1991年保護者会発足）そうした活動を通して子どもたちに飽きさせないよう工夫しながら島唄学習の場を提供しているのである。唄者の育成という観点からみれば、大笠利わらべ島唄クラブはコンクールへの出場意思のある子を個人指導へとつなぐ窓口機能を、結果として⁴⁹⁾果たしていることになる。しかしそれとならんで島唄継承という観点からは、より多くの島唄の需要者層を形成するという機能ももつ。クラブには40名前後の子もたちが参加し、彼らは活動のなかでうまい下手に関係なく島唄・八月踊りの唄を30曲ほど学ぶ。そうすることで島唄の享受能力が育成されていくのである。

iii) ^{のぼり}昇三味線島唄教室／奄美ちぢん・三味線製作所

前項では子ども地域島唄教室に焦点を合わせたが、子どもに限定せず現在活動をしている地域島唄教室に注目し、そのなかでも「第39回奄美市民文化祭」にでた教室をみれば島唄長雲会（島袋徳男）、日置三味線教室（日置幸男）、島唄愛好会（藤山ヨシ子）、花染会（安田富博）、生元島唄会（生元高男）、森山三味線教室（森山博勝）、昇三味線島唄教室（昇和美）、阿世知やまびこ会（里良也）、あやまる芸能保存会（松山美枝子）、あやまる会（松山美枝子）と10の教室が存在する（括弧内は代表者名⁵⁰⁾）。ここでは昇喜代子・和美親子が、奄美ちぢん・三味線製作所を運営しながら、並行しておこ

なっている昇三味線島唄教室をみてみよう。喜代子は宇検村須古^{すこ}の生まれで幼少より母や祖母の島唄を聞いて育ち、若くして多くの島唄・八月唄を修得していた。しかし彼女が本格的に島唄に取り組むようになるのは夫の転勤で1973年に名瀬に帰ってきてからである。そのとき公民館講座の講師をしていたのが武下和平であり、そこを經由して彼女は武下の主宰する島唄教室に通うことになる。公民館講座はここでは、個人指導への窓口となったのである。喜代子の相方をつとめる息子の和美は小学校のときに三味線を習い、その後20年程度のブランクを経て1999年から改めて習うことになった。現在は親子で大会やイベントに参加しており、これまで日本民謡協会奄美連合シマ唄選手権大会最優秀賞など何度も賞を受賞してきている⁵¹⁾。

教室の生徒は現在25名程度であり、そのうち7～8名は学校の先生などの島外出身者である。教室は原則毎日おこない、1回2時間であるが、生徒の仕事の関係上どうしても土日に集中し、ときに食事をする時間もないくらい忙しい。テキストは和美が喜代子の島唄の節回しに合わせて作成した三味線譜であり、そのストックは現在50曲くらいに達する。生徒はそのなかから課題曲を与えられ、教室では和美の個人指導で何度か練習し、一区切りついたところで喜代子の唄に合わせて三味線を弾く。

このとき島唄継承につながる三味線島唄教室と、生業であるちぢんと三味線という楽器の製作とは二重の意味で相補的な関係にある。第1は、昇親子自身が楽器の利用者であり、自らの経験を製作に反映させることができること、第2は、ちぢんや三味線への注文は散発的であり、それゆえ通常は教室の運営に注力できることである。セントラル楽器のHPでは奄美市の三味線教室として昇三味線教室だけが紹介され⁵²⁾、また講師である本人たちの予想を超えて生徒が集まっているということも、そうした事情を反映している⁵³⁾。

2) 関西の地域島唄教室

島唄継承に寄与する地域島唄教室は、奄美だけでなく、関東や中部、九州本土にも存在している⁵⁴⁾。ここでは関西の武下流民謡同好会(武下和平)、森民和会^{みんわ}／関西奄美民謡芸能保存会(森俊光)、上村民謡教室^{かんむら}(望月孝雄)の3つをみていこう。

i) 武下流民謡同好会

瀬戸内町諸数^{しよかず}の出身で、もともと大工であった武下和平は1961年の文部省主催の「第16回芸術祭全国芸能大会」への出場をきっかけとして千代田生命に入社した。仕事の関

係で1962年に古仁屋から名瀬、1967年に沖永良部、1972年に名瀬⁵⁵⁾、1982年に佐賀、1983年に神戸、1988年に尼崎と転勤を繰り返した⁵⁶⁾。武下においても生業である保険外交と島唄とは相補的な関係にあった。彼は契約が成立すると島唄を所望され「保険の仕事とシマ唄唄いとが渾然一体の毎晩、そんな生活に突っ込んでいった」⁵⁷⁾。武下は1974年に、彼を売り出した山田米三の薦めに従って武下流民謡同好会を創始し⁵⁸⁾、名瀬時代に鹿児島教室、1984年に関西同好会、1993年に東京同好会を開設している⁵⁹⁾。2013年現在は東京、関西、鹿児島、名瀬、古仁屋と全国に5ヵ所教室が存在している。全国の生徒数は200名前後、関西はそのうち40～45名で6～7名が島に所縁のない人である。関西同好会の教室は、武下の尼崎の自宅でおこなわれ、1人15～30分の個人レッスン方式である。流派として級制度があり、10級～6級、5級、3級、2級、1級となっており、そのうえに師範初級、師範中級、師範上級とある。地域ごとに責任者がおり、通常は彼らが教えているが、東京には2ヵ月に1回武下が出向いて教えている。鹿児島や古仁屋では年に1回発表会が開催され、それにあわせて武下は当地におもむき生徒の級認定をおこなう。まさに流派としての島唄継承が体系的におこなわれているのである。

このように流派としての島唄継承のあり方に対しては、島唄はもともとシマ（集落）の唄であり、シマごと、唄い手ごとに異なるのが本来のかたち⁶⁰⁾と考える人からは批判の対象となる。しかし山田米三や武下は、人の移動が激しくなり娯楽も多様化している時代状況のもと、このままではシマ唄がなくなるという危機感から流派の創始を思い立ったのである⁶¹⁾。今日自らのシマの唄に忠実に従っているという唄者は少なく⁶²⁾、多くは新旧さまざまな唄のいいと思う部分を吸収しながら、自分の唄を確立している⁶³⁾。武下もそのようにして自らの唄を確立し、流派としてそれを継承しようとしているのである。級認定にみられるように流派のなかでは厳格な踏襲が求められるが、だからといって他の唄者の唄を否定するわけではない⁶⁴⁾。流派による継承も島唄（正確にはそのなかの武下節）継承の1つのかたちとして理解することが重要である⁶⁵⁾。

ii) 森民和会／関西奄美民謡芸能保存会

森民和会は、会主の森俊光によって1980年に設立された。彼は瀬戸内町古志^{こし}の出身で、島唄を本格的に始めたのは関西にでてきてからである⁶⁶⁾。島唄のレコードを購入し、独学で自らの島唄を作り上げていった。2012年で教室は週1回、会員数は11名（森を含む）である。会員のなかには大和人が2名いるが、それ以外は奄美出身者であり2

世3世はいない⁶⁷⁾。森が教室の看板として掲げている言葉は「奄美ぬ民謡や奄美の財産で心である」「島ぬ唄や島ぬ宝で心である」の2つである。島人としてのアイデンティティが島唄を教える強い動機になっていることがわかる。彼は島唄を教室で教えるだけでなく、自身の経営するカラオケ道場で知り合った大和人をツアーを組んで奄美に連れていったり、尼崎市後援のチャリティコンサートで島唄を歌って歌詞の意味を解説したりして島唄の需要層の拡大にも尽力している。その功績もあって彼は2015年現在奄美観光大使でもある。

そのほかに森は、民謡12教室・舞踊7の計19教室（会員数合計179名：2012年4月現在の）の加盟する関西奄美民謡芸能保存会の会長でもある。保存会の会歌の1番の歌詞は「昭和の五十七年に 関西の奄美の友集い 奄美の民謡唄い継ぎ 育成て行かむ永遠に我等は関西奄美民謡芸能保存会」であり、関西の地での島唄継承への意思がはっきりと示されている⁶⁸⁾。島唄の継承は、奄美のなかだけでなく、本土においても組織的になされているのである（ただ保存会の会員数は2003年が283名とピークで2012年は179名と減少している）。

iii) 上村民謡教室

上村民謡教室は、奄美市笠利町崎原^{さきばら}の出身でカサン唄の重鎮である上村藤枝の開設した教室である。関西奄美民謡芸能保存会にも加盟しており、2012年現在で会員数は上村を含め14名、そのうち2世3世は4名、大和人は5名であった。上村は、奄美の復帰前娯楽のなかった時代に奄美各地を巡回して歌い、島唄の魅力を全島に広めた功労者であり⁶⁹⁾、カサン唄の代表的な唄者である。2013年1月27日に彼女は亡くなったが、死後も教室は継続されており30代～60代の直弟子が5名くらい集まって会をつづけている（2013年8月現在）。会の窓口を担当しているのは奄美2世の望月孝雄である（望月孝雄ヒアリング2013年8月29日）。彼においては幼少期に死別した奄美1世の父親の存在が島唄とオーバーラップし、それが島唄学習の動機ともなっている。父親が大島北部の人間であったことから北部のカサン唄⁷⁰⁾を選んだのであり、これも島人のアイデンティティに関連する動機といってよいだろう。

4. 考察：島唄継承における公民館（講座）の役割ならびに文化と経済の相補的關係

前節までで島唄の学習および指導動機を考察したあと、公民館講座や自主講座、地域島唄教室の状況を明らかにしてきた。本節では、まず島唄の需要層、供給層の育成に関して自主講座や地域島唄教室との関係を視野に入れながら、公民館講座および公民館の果たした役割を考察する。そのあとで前節で、武下や昇においてみられた生業（経済）と島唄継承（文化）の相補的關係が、他の唄者においてもみられるのかを検討し、島唄をめぐる経済的価値と文化的価値の關係の現状についても考察する。

1) 公民館（講座）を中心とした島唄の需要層、供給層の育成

公民館講座・自主講座・地域島唄教室はいずれも島唄の需要層の育成という機能をもつ。需要層の育成とは、いいかえれば生徒の享受能力の育成である。価値論のなかに人間の享受能力を位置づけたラスキン（Ruskin, J.）によれば、一定の物財（土地、家屋・諸器具、食物・医薬品・衣服、書物、芸術品）には生命を支える絶対的な力（固有価値）が、人間の使用とは独立に存在しており、そこからどういう有効価値を引き出せるかは、それを使用する人の享受能力に依存する⁷¹⁾。この考えを島唄に適用すれば、島唄は人間の鑑賞以前に固有価値をもっており、鑑賞してそこからどういう有効価値（たとえば感動）を引き出せるかは、鑑賞者の享受能力にかかっているということなる。能力が高まれば高まるほど、島唄から引き出せる有効価値は大きくなる。公民館講座・自主講座・地域島唄教室は、こうした享受能力の育成に寄与するのである。

公民館講座は、島唄大会（コンクール）に出場しようとする者（将来の唄者候補生、島唄の供給層）を直接指導する機能は基本的にもたず、それを主として担うのは地域島唄教室の個人指導である。それでは公民館講座は島唄大会出場者の指導と関係がないのかといえそうではない。本稿で取り上げた事例だと、個人指導をおこなう古仁屋朝花会は瀬戸内町公民館講座を母体に設立されたし、昇三味線島唄教室の昇喜代子は旧名瀬市公民館講座という窓口から武下の個人指導につながる事ができた。自主講座との關係においては、大和村公民館講座からは自発的に補習機能を担う自主講座がつけられたし、笠利の森山公民館講座の場合は最初は住民の森山教室への学習ニーズの受け皿として自主講座が開かれ、後に公民館講座に認定されることになった。このように公民館を

中心として島唄継承にかかわるさまざまな動きが生じたのであるが、なぜ公民館がそのような機能を果たすことができたのかといえ、それは社会教育施設としての公民館の性格に由来する⁷²⁾。社会教育施設には①「基本理念としての「国民の学習権」保障」、②近くにあつて気楽に行ける「地域施設としての性格」、③あらゆる人にとって施設は開かれているという「機会均等の原則」、④それを経済的に支える「無料化原則」、⑤市民の学習を支えるしくみやしかけをつくる「施設職員の専門職化」、⑥運営協議会や講座準備会、公民館利用者懇談会・連絡会（懇談会は公民館事業の一環であり、連絡会は公民館主催ではなく自主的に作った団体である）等への参加というかたちでの「施設運営における住民自治」、⑦思想・信条で差別されない「施設の「自由」と倫理綱領」という7つの原則がある⁷³⁾。身近にあつて（原則②）、あらゆる人に開かれ（原則③）、無料で（原則④）⁷⁴⁾、しかも住民のニーズを反映する（原則⑥）という仕組みであり、それが実際に機能したからこそ、公民館は島唄の需要層や唄者という供給層の育成に貢献できたのである。

2) 唄者の生業と島唄継承の相補的關係

奄美の場合、唄者にプロはいないといわれ⁷⁵⁾、前節でみたように、武下和平は生命保険会社の社員であつたし、昇喜代子・和美親子はちぢん・三味線の製作販売をしていた。彼らのほかにも1979年民謡日本一の築地俊造は玩具店経営とならんで民謡酒場経営、1989年民謡日本一の当原ミツヨは大島紬の織工、1980年奄美民謡大賞で大御所の坪山豊は舟大工、1985年奄美民謡大賞の西和美は郷土料理店経営、2009年奄美民謡大賞の川畑さおりは喜界町役場勤務、前山真吾も介護士というふうに生業をもっていた⁷⁶⁾。

プロの島唄歌手として直接に生計を立てている人はいないとされるけれども⁷⁷⁾、生業と島唄を歌うことが相補的な関係にある唄者は少なくない。筆者がヒアリング、書籍、HPで確認できたものを一部あげれば、武下においては自身の保険の営業に島唄がプラスになっていたし、築地の民謡酒場や西の郷土料理店においては島唄の実演がそれぞれの店の魅力となっていた。当原は民謡日本一受賞後に大島紬のPR事業として全国を回り島唄を披露していたし、川畑さおりにおいては喜界町役場職員として喜界島の観光PRに島唄が役に立っていた。このように、島唄は唄者の生業によってはプラスの効果をもたらしており、筆者は、このことが唄者たちの島唄への継続的なかわりを促進する要因の1つとなっていると考えている（島唄の継承に関して筆者は、この動きを積

極的に評価しているが⁷⁸⁾、ただしこれはあくまでも1つの要因であり、1節でみた唄者の自己実現の欲求の存在も忘れてはいけない。

またこの唄者の生業に対するプラス効果から、奄美の産業における島唄の貢献の連関も推測できる。山田浩之は、文化活動を文化的な財・サービスの生産のために種々の資材や労働が投入される1つの経済活動（営利活動だけでなく、非営利活動も含む）と捉え、同種の経済活動の集計を文化産業と呼び、文化産業のリンケージ（連関）モデルを提示した⁷⁹⁾。

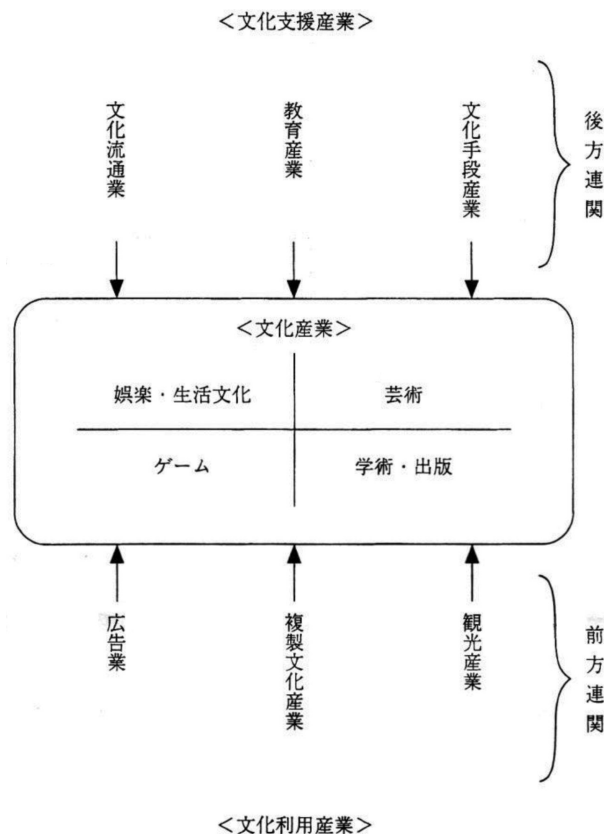


図1 文化産業のリンケージ（連関）モデル
出所）山田浩之（2002）『文化産業論序説』『文化経済学』3（2）、6頁。

モデルの中心には芸術、学術・出版、ゲーム、娯楽・生活文化に関する文化的な財・サービスを生産する文化産業がある。島唄を歌うということを文化的サービスの生産と捉え、文化産業の分類に当てはめれば、それは芸術もしくは娯楽・生活文化のところに

分類できる⁸⁰⁾。文化手段産業とは文化的サービス生産の手段を提供する産業であり、昇親子の三味線製作はここに入るし、郷土料理店での島唄の披露は観光産業との連関で捉えることができる。この連関の種類や規模については実証研究を待つほかないが、島唄という文化的サービスの生産と他の産業との連関が、島唄継承を支える経済的背景として存在することは念頭においておく必要がある。

このとき直接的であれ間接的であれ、島唄という文化と経済的な便益とのかかわりが増えてくると、「経済価値を増大させるから文化は重要である」、逆の極端な言い方をすると、経済的便益につながらない文化には価値がないという考え方が広がりかねない。文化経済学者のスロスビー (Throsby, D.) は「文化は文化的価値を持つからこそ重要であり、文化的財やサービスは、経済資本とは区別される文化資本を内包する」⁸¹⁾として、文化的価値と経済的価値の両方の重要性を主張している。島唄の場合、文化的価値と経済的価値の関係はどうなっているのだろうか。

奄美では、唄者にプロはいないということとの関連で「島唄で金儲けをしてはいけない」という意識および共同体的規制が現在も存在する。2011年奄美民謡大賞の前山真吾はつぎのようにいっている。

もともと奄美の島唄は生活の唄だから、島唄で食っていくためだけにやる音楽ではないというのが昔からの流れだから。今の仕事をやめて島唄だけで食っていくとなったときに、それできるかなとも思うし、自分の唄も変わりそうな気がするんですよ。商業的な唄になっちゃう。奄美ではそういうスタンスが今も引き継がれている (前山真吾ヒアリング2010年8月20日)

島唄の文化的価値については、他の唄者たちも筆者のヒアリング調査のなかでつぎのようにいっている。いくつかピックアップすれば「島唄をあんまり崩すと昔の人にしかられるのではないかと思うわけよ」(生元高男)、「伝統を残していかないといけないから」(当原ミツヨ)、「方言はありがたい、表現がすばらしい」(義永秀親)、「私はカサン節ずっとやっていこうと思っています」(森山ユリ子)、「島唄は絶対に守らないといけない」(石原久子⁸²⁾)、「島唄が途絶したら困るでしょう」(永井しずの)⁸³⁾などである。彼らはその言葉を単に言葉としてだけでなく、自らの実際の行動において島唄関連のイベントやボランティア活動などに積極的に参加するなかで証明している。この状況を考

慮に入れれば、島唄の場合、経済的価値の侵食に対しては依然として抑えが効いている
ということができるだろう。

おわりに：結論と課題

本稿は島唄継承に関して、公民館講座、自主講座、地域島唄教室に注目し、まずは生徒や上級者・講師・唄者の学習動機、指導動機を提示した。その後それぞれの講座、地域島唄教室の状況を明らかにしながら、そこで得られた2つの論点、すなわち公民館講座の果たしたさまざまな役割と、文化的価値と経済的価値の両立という問題に関して考察をおこなった。節ごとに結論をまとめればつぎのようになる。

1節においては島唄を学習する生徒の動機として「島人としてのアイデンティティの確認」「楽しみ・交流」「島唄の音楽的要素や歌詞、奄美文化全体への関心」「先行者へのあこがれ」の4つがあり、後三者は大和にも同様にあてはまることを指摘した。さらにこれらの動機は上級者・講師・唄者にもあてはまり、彼らはその動機にもとづいて活動するなかで、島唄への理解者を増やすことについて自らの潜在的能力を発揮し、それをもって自己実現欲求を充足できている。それゆえ継承活動に長期的にかかわることができているのである。

2節においては和村と奄美市の島唄の公民館講座、自主講座について考察し、公民館講座にはコンクール出場者（将来の唄者候補性、島唄の供給層）を直接的に育成する機能はないが、生徒の島唄鑑賞の享受能力を育成することで、島唄の需要層を厚くする機能があることを示した。行政施策である公民館講座と自主的取り組みである自主講座の関係については、和村では公民館講座が自主講座の母体となっており、奄美市笠利町では自主講座が公民館講座に先立つ住民の学習ニーズの受け入れ機能をもっていた。

3節においては奄美内外の地域島唄教室を調べた。奄美内の古仁屋朝花会には会として唄者の育成機能（供給機能）があり、大笠利わらべ島唄クラブには「島を好きな子を育てる」という考えのもとで、より多くの島唄の需要者層を形成する可能性があり、昇三味線島唄教室／奄美ちぢん・三味線製作所では生業と島唄教室の相補的關係があることを示した。奄美外の武下流民謡同好会には流派としての島唄継承のかたち、生業と島唄教室の相補的關係、森民和会／関西奄美民謡芸能保存会には関西の地での組織的な島

唄継承のあり方が存在することを明らかにした。上村民謡教室では上村藤枝の死後、教室がどのように継続されているかを示した。

4節では、前節までの議論のなかから、第1に島唄の需要層、供給層の育成について公民館（講座）の果たした役割をまとめ、公民館の社会教育施設としての性格がその育成を可能にしていると主張した。第2に唄者の生業と島唄との関係を考察し、生業にとって島唄がプラスの効果をもたらす連関を事例的に示し、そこから経済的価値と文化的価値の両立について検討した。前者による後者の侵食については、現在までのところ島唄に関する共同体的規制が効いていることを指摘した。

本稿では公民館講座、自主講座、地域島唄教室の考察をおこない、島唄継承に貢献した主体および仕組みの一側面を分析することができた。しかし島唄継承に関して、それ以外にも研究しなければならない主体は複数存在する。なかでも奄美内外の島唄に関する文化人、セントラル楽器、南海日日新聞社の3つの調査は重要であり、今度の課題として残されている。

【謝辞】本稿作成にあたり、前田和郎氏、当原ミツヨ氏、当原秀毅氏、生元高男氏、石原久子氏、永井しずの氏、武下和平氏、武下かおり氏、望月孝雄氏、前山真吾氏、森山ユリ子氏、浜川昇氏、大町博之氏、山田逸郎氏、昇喜代子氏、昇和美氏、坪山豊氏、森俊光氏、築地俊造氏、義永秀親氏、上原和夫氏、佐藤隆幸氏、里朋樹氏、小川学夫氏、指宿俊彦氏、池田嘉成氏、渡哲一氏、直美希氏（順不同）といった方々のお世話になりました。ここに記して感謝いたします。

なお、この研究は、平成24-25年度大阪商業大学アミューズメント産業研究所研究費を受けておこなったものです。

〔注〕

- 1) 豊山宗洋(2013)「奄美島唄の継承活動における唄者と民謡大会の役割」『大阪商業大学アミューズメント産業研究所紀要』15、57-82頁。
- 2) 瀬戸内町では自主グループと呼ばれる。
- 3) 豊山宗洋(2013)「奄美島唄の継承活動における唄者と民謡大会の役割」『大阪商業大学アミューズメント産業研究所紀要』15、58頁。
- 4) 梁川英俊(2011)「なぜ島唄を習うのか？ 奄美大島における島唄教室の調査から」『南太平洋地域調査研究報告= Occasional papers』52、11-15頁。
- 5) 当原公民館講座の場合、調査当日にたまたま年配者が多かった可能性もあるが、筆者自身の当原夫

- 妻へのヒアリング（2011年2月16日）でも「自分たちの教室の生徒は高齢者が多い」とのことであった。
- 6) 後述の筆者の大和村の公民館講座調査においても、高齢で地元という参加者が多くいる。
 - 7) 島唄の歌詞には、現在の高齢者が日常生活で使うことのなかったものも多い。簡単だが象徴的なところではアンマという言葉である。大島の日常では「おばあちゃん」という意味で使われ、島唄の歌詞のように「お母さん」という意味では使われない（前田和郎（2011年2月18日）、武下和平（2013年9月2日）ヒアリング）。
 - 8) 逆に、いつでもできるから「今でなくてもいい」となり、関心がなかなか行動にむすびつかないということも生じる（石原久子ヒアリング2011年8月12日）。
 - 9) 梁川英俊（2011）「なぜ島唄を習うのか？ 奄美大島における島唄教室の調査から」『南太平洋海域調査研究報告 = Occasional papers』52、15頁。
 - 10) 山田逸郎ヒアリング（2011年2月16日）。
 - 11) ずっと住んでいるが、Uターン者かはわからない。
 - 12) 梁川英俊（2011）「なぜ島唄を習うのか？ 奄美大島における島唄教室の調査から」『南太平洋海域調査研究報告 = Occasional papers』52、14頁。
 - 13) 末岡美穂子（2004）「東京で奄美のシマウタを習う 島唄教室の現状とその担い手たち」『民俗文化研究』5、178-9頁。
 - 14) 武下和平・かおりヒアリング（2013年9月2日）、望月孝雄ヒアリング（2013年8月29日）。
 - 15) 前山真吾ヒアリング（2010年8月20日）。筆者は、裏声のすごさを実感してもらうために YouTube で「関西奄美会／徳之島シマ唄姫 in 大阪2012.03.11-V2」（<https://www.youtube.com/watch?v=0oPrsluOJJM&index=7&list=WL>）を見るよう薦めている。
 - 16) 森山ユリ子ヒアリング（2012年8月16日）。楠田莉子は2012年8月19日開催の平成24年度民謡民舞少年少女全国大会（中学生の部）でも民謡日本一になっている（日本民謡協会 HP）。
 - 17) 堀田力（1998）「第4章 ボランティアの文化経済学」池上惇・植木浩・福原義春編『文化経済学』有斐閣、142頁。
 - 18) 三島重顕（2009）「経営学におけるマズローの自己実現概念の再考(1)」『九州国際大学経営経済論集』15（2・3）80頁。
 - 19) 島唄自体を対象としない「楽しみ・交流」という動機のウエイトは小さくなる。
 - 20) ただし熱心に学ぶようになる前に難しさのために学習から脱落する、あるいは最初から関心をもたないという人もたくさんいる。関心をもたせるためには、コミュニティ FM での島唄や唄者の紹介や、島唄漫談でのユニークな語りなどはとても重要になる（豊山（2012）「奄美の島おこしにおける組織づくりの研究」『大阪商業大学論集』163、30-1頁）。
 - 21) 2011年度データであるが、宇検村に、奄美市在住で教えにくる場合は7000円、奄美市笠利町からの場合は8000円、瀬戸内町からの場合は7000円である。
 - 22) 1回2時間とすれば時給換算でそれぞれ1950円、2750円、1500円になり 奄美島唄界の重鎮や奄美民謡大賞受賞者の時給が当該金額で妥当なのかという問題はありますが 鹿児島県の最低賃金（2010年度642円、2011年度647円）を大きく上回っている。
 - 23) 堀田力（1998）「第4章 ボランティアの文化経済学」池上惇・植木浩・福原義春編『文化経済学』有斐閣、140頁。
 - 24) 自己実現との関係を筆者なりに整理しておけば「当該者は、理解者を広めることのできる潜在的な力をもっている。それを実現（自己実現）すれば理解者が実際に増えることになり、それによって自らの存在意義を確認できる」となる。
 - 25) それ以外に社会的に評価されること、たとえば島唄大会での好成績、各種団体からの活動の表彰（大笠利わらべ島唄クラブの場合、2000年に代表の山田逸郎が笠利町文化功労賞、2003年にクラブが青少年育成国民議会会長賞を受賞）、公民館講座の講師依頼、各種イベントへの招待、マスコミでの紹介などでも確認できる。それには金銭的報酬（実費補填を含む）がともなう場合もともなわない場合もある。
 - 26) 泊忠重は1977年に「後に続くひとたちが少ない」と述べ（梁川（2013）「奄美民謡の継承と地域の

島唄継承における公民館講座の役割ならびに文化と経済の関係に関する一試論

- 創造 南海日日新聞の記事を中心に」梁川英俊ら『歌は地域を救えるか：伝統歌謡の継承と地域の創造』15-36頁）。旧笠利町の公民館講座の開設に関しては、『南海日日新聞』1975年2月18日号に、青少年の中には島のウタを全く知らない人が多く、笠利節がすたれる心配があったために開設したことが記されている。また島唄の歌詞を構成する方言（島口）は昭和30年代になって、高度成長および奄振事業による生活の変化にともなって急速に衰退した（田畑千秋（2007）『民話を支えてきた言葉の消滅 奄美で方言矯正教育を受けた者の報告』『聴く 語る 創る』16、92頁）。
- 27) その後池田嘉成、阿世知幸雄、生元高男と継承された（池田嘉成ヒアリング2011年2月18日）、ただし武下和平は仕事上の転勤の関係で2度講師を担当している（武下ヒアリング）。
- 28) その後渡哲一に替わった（渡哲一ヒアリング2011年2月17日）。
- 29) 島添貴美子（2008）『奄美シマウタにおける伝統の再帰と創造』東京藝術大学音楽学部楽理科博士論文ライブラリー、105頁。
- 30) <http://www.city.amami.lg.jp/kikaku/shise/koho/kohoshi/tayori/documents/h2604amami.pdf>
- 31) 宇検村教育委員会・直美希からのメール。
- 32) <http://www.town.tatsugo.lg.jp/-files/00013338/kouminnkannkouzaura.pdf>
- 33) 実際は三味線教室と呼ばれているが、個人の主宰する地域島唄教室と区別するために三味線講座と表記する。あとの島唄講座も同じである。
- 34) 大和村公民館館長・大町博之ヒアリング2011年8月11日。
- 35) 奄美大島では多くの地域で旧暦7月13日～15日でお盆行事がおこなわれ、2011年は新暦8月12日～14日がその時期にあっていた。
- 36) 音楽的素養のある人にとってはその難しさはすぐわかるであろうが、そうでない人にとっては似顔絵を描く難しさに似ているといえば、イメージがわきやすいかもしれない。一生懸命似せようと思って描いてもなかなか似た絵にならない、あの難しさである。
- 37) 名瀬公民館講座の場合、年度当初70～80%の出席率が年度末になると40～50%に減っている。
- 38) 転勤組の存在に関しては公民館講座によって異なり、奄美市笠利の森山ユリ子公民館講座では転勤組はほとんどいないが、同じ笠利の前田和郎公民館講座、宇検村の石原久子公民館講座、瀬戸内町の永井しずの公民館講座では転勤組が存在している（それぞれへのヒアリング）。
- 39) 名瀬公民館職員・上原和夫ヒアリング2011年8月8日。
- 40) 中原ゆかり（1997）『奄美の「シマの歌」』弘文堂、42頁。
- 41) 昔の島唄は歌い方が早く、ゆったりと歌う島唄を「ナツカシイ」「ナグルサ」として最高に評価するのは最近のことであるという意見もある（間弘志（2003）『全記録 分離期・軍政下時代の奄美復帰運動、文化運動』南方新社、205頁）。
- 42) 島添貴美子（2008）『奄美シマウタにおける伝統の再帰と創造』東京藝術大学音楽学部楽理科博士論文ライブラリー、106頁。
- 43) 須山聡（2014）『奄美大島の地域性 大学生が見た島／シマの素顔』海青社。
- 44) 朋樹は2002年に奄美民謡大賞少年部最優秀賞、歩寿（ありす）は2010年に奄美民謡大賞を受賞している。朋樹が中野から習った期間は小学校1年から3年くらいまでのあいだである（里朋樹ヒアリング2011年8月3日）。
- 45) 中野豊成の死（1999年）後の同会の現状について筆者は把握していないが、2011年2月17日の義永秀親からのヒアリングで、中野の死後、瀬戸内町勝浦で富田義広が継続していたという話は聞いている。
- 46) 島添貴美子（2008）『奄美シマウタにおける伝統の再帰と創造』東京藝術大学音楽学部楽理科博士論文ライブラリー、154-5頁。
- 47) たとえば小川学夫の勤務していた大学で、元ちとせの活躍以降「自分の親が奄美出身だ」とか「奄美からきた」とか自らの出自を述べる学生が明らかに増えた（小川学夫ヒアリング2013年3月28日）。
- 48) わらべ島唄の勝手なブログ（http://www.ikz.jp/hp/dai1910/choku4_index.html）。
- 49) つまりその窓口機能をねらって活動をやっているわけではない。
- 50) <https://www.city.amami.lg.jp/kikaku/shise/koho/kohoshi/ocuments2610amami.pdf>

- 51) 昇喜代子・和美ヒアリング2014年2月15日。CD「親先祖ぬ残ちゃん島唄」解説文。
- 52) 大島全体でみればもう1つ、宇検村の石原久子三味線教室があげられている(2015年1月29日現在)。
- 53) セントラル楽器代表取締役社長・指宿俊彦ヒアリング(2012年8月15日)。
- 54) セントラル楽器 HP、南海日日新聞社『月刊奄美』2015年1月号。
- 55) 昇喜代子はこの時期の武下の公民館講座に通っていた。
- 56) 武下和平(2014)『唄者武下和平のシマ唄語り』海風社、182、187、190頁。尼崎への転勤年はヒアリング時の神戸5年から推測した。
- 57) 武下和平(2014)『唄者武下和平のシマ唄語り』海風社、184頁。
- 58) その経緯については島添貴美子(2008)『奄美シマウタにおける伝統の再帰と創造』東京藝術大学音楽学部楽理科博士論文ライブラリーに詳しい。
- 59) 武下和平(2014)『唄者武下和平のシマ唄語り』海風社、188頁。
- 60) これには2つの意味が考えられる。1つはシマのなかで唄い手ごとに唄が異なるという状況のもと、特定の唄者の唄で集落の唄を代表させる場合である(「A氏の唄こそB集落のシマ唄である」)。もう1つはシマに共通する単語やイントネーションや旋律によって、異なる唄者の唄のなかにシマに共通の要素があるとする場合である(「C氏の唄もD氏の唄もE集落のシマ唄である」。いずれにせよ変化は特定の枠のなかで生じ、枠自体が変化する場合もそれは徐々に生じることになる。
- 61) 武下和平(2014)『唄者武下和平のシマ唄語り』海風社、187頁。
- 62) 皆無というわけではない。石原久子、昇喜代子、生元高男らにはそうした志向性が強くみられる(それぞれへのヒアリング)。
- 63) 島添貴美子(2008)『奄美シマウタにおける伝統の再帰と創造』東京藝術大学音楽学部楽理科博士論文ライブラリー、132頁。
- 64) 武下流師範の榮百々代は、自身が武下流師範として招待されるときは流派としての島唄を歌う。しかし師範としての制約がないところでは、感情表現等を自分なりに工夫している(榮百々代ヒアリング2012年7月9日)。
- 65) 島唄を学習しているかいないかにかかわりなく、島唄の需要層として本土の、同じシマあるいは市町村の出身者同士の集まりである郷友会についての武下の次の言葉は興味深い。「教室を開くのを進めてくれたり、コンサートを企画してくれたり、それは郷友会の中心の人たちです。」「私は思うんですけど、いまシマ唄は、こういう望郷の想いを心の奥底に秘めて本土で暮らしてこられた人々によってこそ支えられているんじゃないかなあ。島だけの力だったら、到底シマ唄は生き延びてこれなかったんじゃないかなあ」(武下和平(2014)『唄者武下和平のシマ唄語り』海風社、192-4頁)。そこで郷友会等が本土で実施しているイベントで、島唄が歌われたと記載のある記事を、南海日日新聞社『月刊奄美』2014年1月1日号～6月1日号の半年間の記事で拾ってみた。

表3 『月刊奄美』(2014年1月1日号～6月1日号)に掲載された本土で島唄が披露されたイベント

	開催日時	主催者	郷友会	同窓会	保存会他
1	2013年11月24日	中部奄美会の婦人部組織「さねん花会」	1		
2	2013年12月14日	筑紫女学園大学			1
3	2013年11月24日	鹿児島奄美会	1		
4	2014年1月19日	関西在住の実久地区会	1		
5	2014年1月19日	東京奄美会	1		
6	2014年2月2日	東京龍郷会	1		
7	日付なし	関西奄美会	1		
8	2014年2月23日	大阪沖洲会	1		
9	2014年2月9日	神戸沖洲会館	1		
10	2014年1月26日	関西瀬戸内会	1		
11	2014年1月26日	関西名瀬会	1		
12	2014年2月2日	名古屋徳之島会	1		
13	2014年1月31日～2月2日	奄美市・奄美大島観光物産協会			1

島唄継承における公民館講座の役割ならびに文化と経済の関係に関する一試論

	開催日時	主催者	郷友会	同窓会	保存会他
14	2014年1月26日	鹿児島奄美会			
15	2014年2月16日	名古屋地区俵会	1		
16	2014年3月2日	関西奄美相撲連盟			1
17	2014年3月23日	神戸沖洲会館			
18	2014年3月2日	小村ゆらお会			1
19	2014年3月9日	中部笠利会	1		
20	不明	友好団体「おぼらだれん」			1
21	2014年4月13日	関西奄美会/関西奄美民謡芸能保存会			1
22	2014年3月23日	関西嘉入会	1		
23	2014年5月11日	ティグドリーム（問い合わせ先）			1
24	2014年4月12日、13日	日本民謡協会九州地区大会実行委員会			1
25	2014年5月18日	関西与路会	1		
26	2014年4月27日	関西前田ヶ丘同窓会		1	
27	2014年5月18日	関西古仁屋会	1		
28	2014年5月18日	団体「おぼらだれん」			
29	2014年5月10日	南海日日新聞社、奄美市教育委員会共催			
30	2014年7月6日	奄美郷友会			
31	2014年5月11日	ティグドリーム（問い合わせ先）			
32	2014年5月11日	東京赤木名会	1		
		合計	17	1	8

注) シャドウ部分は表内で主催者が重複した分。

17の郷友会、1つの同窓会、8つの保存会等によって島唄を披露する機会が本土で設けられていることがわかる。

66) 森俊光ヒアリング2013年8月29日。

67) 関西奄美民謡芸能保存会(2012)『創立30周年記念総会並びに発表会』37-8頁。ただし保存会加盟の12の島唄教室の全会員数113名のうち、19名は2世3世である。

68) それ以外にも、芸能を通じて奄美の出身の島を越えた交流を深めるために、保存会は大島だけでなく、徳之島、喜界島、沖永良部島、与論島で公演もおこなっている(『月刊奄美』2014年3月1日号)。

69) CD「本場奄美島唄 上村藤枝」の解説文。

70) 島唄は大島北部のカサン唄と南部のヒギヤ唄に大別される。

71) 木村正身(1950)「ジョン・ラスキン『ムネラ・ブルウェリス(二)』」『香川大学経済論叢』23(1)、66-7頁。二宮厚美(2000)二宮厚美(2004)「人間発達とコミュニケーション」『神戸大学発達科学部研究紀要』7(3)、189-90頁。後藤和子(2001)「第2章 文化政策の理論的基礎」後藤和子編(2001)『文化政策学：法・経済・マネジメント』有斐閣、51頁。

72) ほかの社会教育施設は図書館、博物館である(永田香織(2013)「第6章 社会教育・生涯学習の施設・行政とボランティア活動」松田武雄編『現代の社会教育と生涯学習』九州大学出版会、127頁)。

73) 永田香織(2013)「第6章 社会教育・生涯学習の施設・行政とボランティア活動」松田武雄編『現代の社会教育と生涯学習』九州大学出版会、131-4頁。

74) 自治体の財政悪化で有料化や使用料・入館料の値上げが実施されているところもある。筆者のヒアリングでも「公民館でやりたいが、使用料が高くなっているの、違う場所を探しやっている」という話を聞いた。

75) 小川学夫(1984)『「民謡の島」の生活誌』PHP研究所、165頁。

76) 指宿邦彦(2012)『奄美島唄学校』21頁、筆者のヒアリング、HPにもとづく。

- 77) 生計を立てる、立てないの判断はプライバシーにかかわることであるので難しいことは注記しておく。
- 78) この場合、島唄を趣味と考えると非常に理解しやすい。プラスの効果をもたらすのはまさに趣味と実益を兼ねるという話になる。逆に、趣味にうつつをぬかして生業がおろそかになるということもありうる。
- 79) 山田浩之(2002)「文化産業論序説」『文化経済学』3(2)、4-6頁。
- 80) 山田は個々の文化形態のなかには全体は芸術であっても、細分すると、娯楽・生活文化に入る場合もあるとしている(山田浩之(2002)「文化産業論序説」『文化経済学』3(2)、7頁)。
- 81) 後藤和子ら(2014)「監訳者あとがき」デイヴィッド・スロスビー著・後藤和子／阪本崇訳『文化政策の経済学』ミネルヴァ書房、295頁。
- 82) 前述の前山は石原の弟子であり、前山の姿勢も多分に石原の影響である。
- 83) 加藤晴明・寺岡伸吾(2014)「奄美大島の唄文化と文化メディアーター」『中京大学現代社会学部紀要』7(2)、113頁。